

日 文 中 文 對 照

日 本 的 民 間 故 事



日 文 中 文 對 照

日 本 的 民 間 故 事

前 言

這本《日文·中文對照，日本的民間故事》的內容是過去在霞山會所發行的介紹日本情況的中文月刊《日本展望》上登載的，自從一九七〇年四月（第14卷第4期）起至一九七八年五月（第22卷第5期）止每期刊登一篇，連載約八年，共六十五篇。

這次彙集成冊印行，為的是為正在學習日語的諸位讀者提供一本輔助日語讀本。

日本人的「心理」和「思考問題的方法」，歷來是為外國人難於捉摸的，讓諸位讀者多接觸一些這方面的材料以便了解日本人的「心理」和「思考問題的方法」，這也是我們彙集印行這本輔助讀本的目的。

日本的這些「民間故事」和「神話傳說」是從古代日本人的祖先的生活中產生以後在過去的幾百年裡經世世代代口傳流傳下來的。日本人的「心」豐富地體顯在這些「故事」和「傳說」裡。

在彙編這些「故事」時，我們參考了柳田國男著：《日本昔話（古代傳說）名彙》；坪田讓治：《日本昔話》；西本鶏介：《日本昔話集》，《日本傳說集》；武田靜澄著《日本傳說集》等，謹誌致謝。擔任翻譯的是劉文獻先生等。

一九八二年一月

日本の古代寓言、神話と傳説、日本の故事與傳説

目次

猫と鼠	一
おじいさんとつなぎ	二
ごんべえと鴨	三
米良の上漆	四
歌の上手な亀	五
お地藏さま	六
くらげの骨なし	七
古屋のもり	八
ねずみの相撲	一〇
猿正宗	一二
天人子	一四
金剛院と狐	一六
竜宮からきたお嫁さん	一八
一寸法師	二〇

団子津土	二二
猿とかわうそ	二四
灰繩千束	二六
タニシ	二八
天福地福	三〇
猿と猫と鼠	三二
龍宮の娘	三六
薬稽長者	四〇
オキクルミ物語	四六
信濃の早太郎	五六
天津速駒	六〇
百合若大臣	六四
幸福のたね	七〇
石ころ島	七六
アマンジャクの失敗	七八
お高の唄	八二
ものいう布団	八四
お稻荷さまと安兵衛	八六

天の羽衣	八八
養老の滝	九〇
貴狐明神	九二
佐久の生駒姫	九四
阿古耶の松	九六
金木犀の花	九八
姫宮のひひ退治	一〇〇
お化け車	一〇二
田植之地蔵	一〇四
ぶんぶく茶がま	一〇六
大里峠の蔵の市	一〇八
瀧口入道	一一〇
ねずみの嫁入り	一一二
まんじゅうこわい	一一四
のっぺらぼう	一一六
本殺しと半殺し	一一八
あづき三升もち米三升	一二〇
黄金の茄子	一二二

不思議なたいこ	一二四
お正月の神さま	一二六
鬼になったおばあさん	一二八
竜になった坊太郎	一三〇
キツネと馬ひき	一三二
捨てられた奥さん	一三六
耳なし芳一	一三八
とんぼ長者	一四二
キツネに化けた男	一四四
鳥になったおもち	一四六
大アワビの怒り	一四八
宝の袋	一五〇
安寿と厨子王	一五二
サルとカニ	一五六
江戸の蛙と京都の蛙	一五八

日本的古代寓言

(中日文對照)

猫と鼠 猫鼠恩仇

むかし、むかし、天の神様から、世界中の動物どもに「今度、動物の中から十二匹えらんで、一年間ずつ、人間の世界を守らせることにした。先に着いたものから順にきめて行く。一月十二日に、私のところに集まれ。」というおふれが出ました。これを知った動物どもは、(自分こそ一番に行つて、順番の第一になるぞ。)と、その日の来るのを待ちました。ところが、猫は、へいせいから忘れっぽく、つい、その日が何日か忘れてしまいました。困っているところ、ちよど道で鼠に出あい、これ幸いと、

「鼠さん、鼠さん、あのおふれにあった、われわれが集まるという、あの日は、あれはいつだったかね。」とこう聞きました。鼠は自分こそ順番の一番になろうと思つてゐるものですから、「あれは一月十三日です。」と、一日おそい日を教えてやりました。(まずこれで猫にだけ勝つことになつたが、)と、考え

考へ、家へ帰つて行きました。鼠の家というのは牛小屋の天井裏にあつたのですが、帰つてみると、牛がもう出発の用意をしております。「牛さん、牛さん、もうお出かけですか。」と、きいてみますと、牛のいいますことに、

「いや、おれは足のろいのでなあ、今夜のうちにたたんと、間にあわないのじゃ。」

これを聞くと、鼠はまたずるいことを思いつき、そつと、牛の荷物の中に忍び込んだのです。牛はそんなことは少しも知らず、夜どおし歩きつづけて、神様の御殿にやつて来ました。見ると、まだだれも来ておりません。(やれうれしや、これで一番になれた。)と、ほつと大息をついて、神様の前へ出ようと思はずと、とつせん荷物の中から鼠が飛び出しました。そして、「第一番は鼠でござる。」と、名のりをあげました。牛はどんなにらくたんし、腹をたてたことでしょう。しかし、それよりもまだ腹をたてたのは猫でありま

す。鼠に教えられた十三日、猫は息せききつて、神様のところへかけつけました。見るとだれも来ておりません。(しめた。このおれさまが第一番。)そう思つて、門の中へかけ込もうと思はずと、神様

の御殿の門番にとがめられました。そして、

「順番をおきめになる日は昨日だった。順番は、鼠が一番、それから、牛、虎、兎、龍、蛇、馬、羊、猿、鶏、犬、猪の順にきまつた。ねばけていないで、顔を洗いなさい。」といわれ、初めて、猫は鼠にだまされたと知つたのです。そして、「おのれ、にくい鼠のやつ」と、にわかには牙をみがき、爪をとぎ始め、それ以来、鼠さえ見れば、洗うのは、神様の御殿の門番に、「ねばけていないで、よく顔を洗いなさい。」といわれたからさうでありますよ。

〔中文大意〕 従前有一次、天公向全世界的動物宣佈說：「現在要從你們動物裏挑出十二個來，每年輪流守護人類的世界。誰先到誰有份兒，順意的話一月十二號在我這兒集合。」

動物們知道了，都躍躍欲試，「這回看我的，可要搶它一個頭陣。」大家都盼望着那一天的來臨。可是只有貓平常就健忘，終於把日子給弄混了。「糟糕，怎辦？」正在着急，路上碰到了老鼠，如獲大赦，就問：「鼠兄，鼠兄，上次宣佈說叫我們集合的是哪一號呀？」這時候的老鼠，當年跟貓交情還是不壞的，但爲了自己先登，就故意施了個緩兵之計：「那是一月十三號。」牠說。

「這一來可以門過貓了，但是還大意不得。」老鼠想着，回到了自己的家。所謂「家」是在小牛舍的天花板上。一回來發現牛已要動身了，就道：「牛兄，牛兄，已經要出發了嗎？」「唔，俺的牛步慢，今晚不走可要來不及的。」老鼠一聽，又計上心來，偷偷鑽進牛背包裹，一塊兒起程。

走了一晚，笨手笨脚的牛哥兒好不容易抵達了神殿。一看周遭，空蕩蕩的，「嚇，還是俺有辦法」，喘了口大氣，渾身輕鬆，得意洋洋。沒想到突然背包裹跳出來老鼠，劈口就是一句：「第一名是酒家！」叫得牛哥兒直瞪眼。

然而更惱火的還是貓。十三號趕到神殿門口，鬼影子都不見一個。「嘿！够膽的！老子第一。」興緻勃勃地正想跑進去，却一槍被擋了回來，看門的說：「昨天已經定了，老鼠第一，底下是牛、虎、兎、龍、蛇、馬、羊、猴、雞、狗、猪。小子還在睡覺，別迷迷糊糊的，回去洗你的臉吧！」貓這才明白被騙了，於是跟老鼠成了世仇，而他常用前脚洗臉，也是因爲被門神噓了一記的緣故。

日本的古代寓言

(中日文對照)

おじいさんとうさぎ

老公公和兔子

むかし、むかし、おじいさんがおりました。おじいさんはきこりで、まいにち山で木をきっておりました。ある日のこと、たくさん木をきったので、すっかりつかれてしまいました。「ああ、つかれた。それを、おなかもすいた。」と、木のかぶにこしをかけ、おにぎりをたべようとして、まえを見ると、くさのあいだからうさぎが、さもたべたそうにおじいさんを見ていました。

「おお、おまえもたべたいのか。」そういって、おにぎりを一つなげました。すると、おにぎりはひとりでにころがって、あなの中に入ってしまった。するとうさぎはびよんと、あなの中へ入っていききました。するとあなの中から「おにぎり、ころりん、すっとん」といい声でうたがきこえました。おじいさんはおどろきました。そこで、もう一つおにぎりをそのあなの中へころがしました。するとまた「おにぎり、ころりん、すっとん」といい声がしました。おじいさんはおもしろくなって、おにぎりをたくさんなげこみ、おにぎりをなげこみました。すると、きのうのように、「おにぎり、ころりん、すっとん」といい声でうたがきこえました。そこでまた、おにぎりをつきつきとなげこみました。

またそのつぎの日もおじいさんは「きょうはどうだろう。」とおにぎりをなげこみました。やはりいい声でうたがきこえました。そこでまた、おにぎりを一つおにぎりをなげこみました。おにぎりがころがって、おべんとうばこまでなげこみまじかると、「おべんとうばこ、ころりん、すっとん」とうたがきこえました。

おじいさんはおもしろいので、こんどは自分であなのそばへ行き、中をのぞきました。すると足がすべって、あなの中へおちました。と、こんどは「おじいさん、ころりん、すっとん」とうたいました。おじいさんは目をばちくりして、まわりを見まわしました。おどろいたことに、たくさんのうさぎがうすをならべて、おもちをついて

いました。そしてあなで、声をそろえてうたっていたのです。おじいさんがおちてきたのをみると、みんなもちつきをやめ、おじいさんのまえにならびました。その中のいちばん大きなうさぎが、おじいさんにあいさつしました。「おじいさん、おにぎりをまいにちあげがどうございます。きょうは、正月のもちつきをしております。どうぞ、ゆくりあそびしてください。」

「おにぎり、ころりん、すっとん、ころりん、すっとん、おべんとうばこ、ころりん、すっとん、おじいさん、ころりん、すっとん。」と声をそろえてうたいたが、もちつきをはじめました。

おもちがつきあがると、おじいさんに大きなおもちがだされました。おじいさんがたべてみると、とてもおいしいおもちでした。おじいさんはおもちをたくさんたべ、たくさんのおもちをもらって、うちへかえりました。むかしむかしのおはなしです。

【中文大意】 従前有個樵夫的老公公，每天上山砍柴。有一天他砍了許多柴，覺得累極了，叫道：「啊，累了累了，肚子餓了」，就找了根砍剩的樹幹，想坐下來吃飯團子。一看前面，草叢裏有兔子溜溜地竊着他，好像很羨慕的樣子。

「哦，你也想吃嗎？」老公公說着，就抓了個飯團子扔了過去。飯團子在地上滾了幾下，却滾到洞裏去了。兔子一瞧，跳將起來，也忽地閃進了洞裏。這時候洞裏傳來了很好聽的歌聲：「飯團子呀，咕嚕咕嚕滾滾來蹦蹦跳跳呀！」

老公公很是詫異，再扔了一個，而洞裏又傳來了歌聲。他可覺得好玩兒了，就一個接一個地扔了進去，把飯團子都給扔完了。

第二天，老公公想：「今天怎麼樣？」他試了一天，結果歌聲同樣地美妙，他再一次把飯團子接二連三地往下扔。第三天情形還是一樣，他樂得手癢，這回連飯盒兒都扔了。「飯盒子呀，咕嚕咕嚕滾滾來蹦蹦跳跳呀！」飯盒兒下去，洞裏這樣唱。

老公公一起勁兒，就自己跑到洞邊兒往裏看，可是腳一滑，却掉下去了。於是乎：「老公公呀，咕嚕咕嚕滾滾來蹦蹦跳跳呀！」

老公公滾到洞底，眼睛眨了又眨，定下神看看四周。嚇，原來是一大群兔子擺開了白在擣年糕，是大夥兒齊聲唱的歌兒。一見老公公掉下來了，大家都停住不擣，跑到老公公前面排成了隊。裏面最大的兔子來向老公公問好說：「老公公，謝謝您每天給我們飯團子，今天我們在擣年糕，請在這兒玩個痛快吧。」

年糕好了，給了老公公一大塊，很好吃很好吃。老公公吃得飽飽的，告別時還帶回來了兔子們的許多禮物呢。

日本的古代寓言

(中日文对照)

ごんべえと鴨

権兵衛和野鴨子

むかし、むかし、ごんべえという男がいました。ごんべえさんの家のちかくに沼がありました。その沼には秋から冬にかけて、たくさん野鴨が飛んできました。

ごんべえさんは、その鴨をワナでとってくらしをたてておりました。毎日、ワナを一つかけて、鴨を一わだけとっていました。

「一日一わなんてめんどくさい。一度に一〇〇とれば、あとの九十九日は遊んでくらせる」とごんべえさんは考えました。

そこで、ごんべえさんは沼の水の上に一〇〇のワナをしかけました。そのワナというのは、長い縄にたくさん輪をつくり、それに、鴨の足がひっかかるようにしたものです。

さて、ごんべえさんがワナをしかけて、木のかけにかくれて、縄のはしっこをもって鴨のか

かるのを待っていました。だんだん明るくなって、ごんべえさんが「一わ、二わ、三わ」と鴨をかぞえてみますと、なんと、もう九十九わもかかっております。「あと一わで九十九日は遊んでくらせる」と思って、縄のはしっこをもって、待っていました。ところがあとの一わがなかなかかかりません。

だんだん夜が明けて日の光が沼の上にサツとさすと、九十九わの鴨は一度にバタバタと飛び上がりました。

縄のはしをもっていたごんべえさんもひきずられて、鴨と一緒に空高く、引き上げられてしまいました。鴨達はひとかたまりになって、山をこえ、見知らぬ村へ飛んでいきました。そのうち、ぶらさがっていた縄が、ブツリと切れ、アツというまもなく、下へ落ちました。

ところが、落ちる途中、いつのまにかごんべえさんは、鴨になっ

しにおりました。魚が一匹泳いでいるので、食べにいくと、なにか足に引っかかりました。もがいてもとれません。よく見ると鴨をとるワナでした。これを知るとごんべえさんは悲しくなりました。

「ああ、なんとしたことだろう。一わの鴨をとっても、かわいそうなのに。自分は一度に一〇〇わとって、九十九日あそんでくらそうとした。そのパチがあたつて、鴨になったばかりか、ワナにまてかかって、自分が鴨にしたと同じような目にあうことになった。悪いことは出来ないものだ。」そう思って、涙をこぼすと、その涙でワナがボロリと切れ、「やれ、ありがたや」とまた涙をこぼすと、その涙が身体に流れ、人間のごんべえさんになりました。ごんべえさんは、鴨とりをやめ、やさしいお百姓さんになりました。

〔中文大意〕 従前有個叫權兵衛的，他家附近有個水沼，從秋天到冬天的時候兒，有許多野鴨子飛來，他就弄起圈套，捉野鴨子過活。

他每天只弄一個套子，只捉一隻。可是他想：「一天一隻太麻煩，一次捉牠一百，剩下的九十九天就可以玩兒了。」於是權兵衛就在水沼凍了的冰上弄了一百個套子，那是在一條長繩子上結了許多圈套，好絆住野鴨子的脚。

他把圈套設好，就躲在樹蔭下拿着繩子的一頭，等着野鴨子上套子。天色漸亮了，「一隻、兩隻、三隻」，權兵衛一算，居然套住了九十九隻，「再一隻就可以玩上九十九天了」，他想着，就抓着繩子在那兒等，可是剩下的一隻却很不容易套上。

天更亮了，陽光一照在水沼上，九十九隻野鴨子一下子吧搭吧搭飛了上去，權兵衛也跟着被捲上了天空。野鴨子成群越過山嶺，飛到一個陌生的村莊。這時垂着的繩子噴地一聲斷了，剎那間掉了下去。

可是往下掉時權兵衛不知不覺變成了一隻野鴨子。他飛下村子的水沼，有一條魚在游着，想走過去吃牠，却被什麼東西把脚絆住了，怎麼掙都掙不脫，仔細一看，原來是捉野鴨子用的圈套，他覺得很難過。「啊，這是怎麼回事兒！野鴨子捉一隻也够可憐的，而我却想一次捉牠一百，玩上九十九天！上天報應，我不但成了野鴨子，還上了圈套，落得跟野鴨子一樣的命運！壞事是做不得的。」這樣想着，眼淚一掉，把繩子嗚地掉斷了。他謝天謝地，眼淚又使他恢復了人身。

權兵衛從此不再捉野鴨子，變成一個和善的老百姓了。

日本的古代寓言

(中日文对照)

漆の上の良米

むかし、むかし、日向の國の米良の山里に安左衛門と十兵衛という二人の兄弟が住んでいました。二人は米良の山奥へ入って、漆の木から漆をかき取って、それを売って暮らしていました。ある日、兄の安左衛門が漆を取りに行く途中、大きな淵にあやまって持っていた鎌を落してしまいました。すぐはだかになつて水に飛び込み底の方にもぐつて行きますと大きな淵の底一面が漆なのです。黒々としてつやがあり、光がある立派な漆なのです。良い値段で売れる漆が淵の底にいっぱいたまっているのです。

安左衛門は大変喜びました。もう山へ入つて少しづつ漆をかき集めることはいりません。この水底に、取ろうと思えば、沢山の漆があるのです。それから毎日少しづつ漆を取り出し、それを、高い値段に売って金もちになりました。

そのことを知った弟の十兵衛もそこから漆を取って売ろうようになりましたが、今まで自分一人で行っていた安左衛門は、これがどうも気に入りません。(だれにも取らせず自分一人で行つても取つていたいものだなあ)。いろいろ考えたあげく、安左衛門は町の彫物師のところへ行って大きな龍のほりものを木で作ってもらい、その角やうろこに赤や青の絵具を塗り、目は金や銀で色どり、まるで生きている龍の通りに作って、それをだれにも知られぬようにそつと大淵に持って行って沈めました。

木で作ってもらつた龍で、しかも昨日そこに持ってきて沈めたばかりの龍が、それが何と一晩のうちに魂が入り、今は本当に生きていたのでした。安左衛門が漆を取ろうと、そちらに近寄ると、大きな口を開けて、安左衛門ひとのみと飛びかかつて来ました。こんなはずはないと、何度も戻つてはまた行きなおして見ましたが、何度行つても、もう龍は生きた本当の龍になっていました。こんなことなら、初めから兄弟二人で、仲よく漆を取つていればよかったと後悔しましたが、もうどうすることもできませんでした。

〔中文大意〕 從前日向國米良的一個山村裏，住着安左衛門和十兵衛兩兄弟。兩人到米良的深山裏從漆樹上刮下漆來，賣了過日子。有一天哥哥的安左衛門去採漆的途中，不留神拿着的鎌刀掉進一個大水淵裏去了。馬上脫下衣服跳進水裏滑到底下，安左衛門嚇了一跳：淵底一片都是漆，黑沉沉的光澤的好漆。

安左衛門十分高興，再不用上山點點滴滴地刮了，這水底只要想要，再多的漆都有。從此每天採一些，賣了很好的價錢，成了一個有錢的人。

知道了這件事的弟弟十兵衛，也開始從那兒採漆來賣，過去一個人幹好事的安左衛門對這事老不痛快，(誰也不讓碰，永遠一個人採多好嘛)！想來想去，最後安左衛門去找街上的雕刻師用木頭雕了一條大龍，龍角和鱗片塗上了紅藍顏料，眼睛是金銀，就像活的一樣，把它神不知鬼不覺悄悄地拿到大水淵沉了下去。

十兵衛不明底細，跳進淵裏。到水底一看，可不得了，一條大龍狠狠地瞪着眼睛呢！什麼漆不漆的，慌慌張張爬了上來，草草披上衣服就跑了。

看到了這一幕的安左衛門可樂了，(不怕不怕，從此一個人可以自由在地採漆了)，就立刻往下跳。可是怎麼回事兒，那條木刻的龍竟一夜之間生了魂，現在居然活着呢，安左衛門想接近採漆，就張開大嘴撲將過來。沒這道理，一次又一次退回來再過去，可是不管怎麼試，那龍已變成了活着的真龍了。

他很不得，當初弟兄倆和氣氣採漆就好了，他後悔着，可是已沒辦法了。

日本的古代寓言

(中日文对照)

歌の上手な亀

會唱歌的烏龜

むかし、ある所に兄と弟が住んでいました。お父さんがなくなりまして、兄は欲ばり者で、家のお金や道具等をみんな持って出て行ってしまいました。しかし、弟は親孝行でしたから一人家に残って、お母さんを大切に暮らしました。大切にするとお母さんがありませんので、毎日山へ行つては枯れ枝を集め、それを町へかついで行つては売つて歩き、もうかつたわずかなお金で、お米を買つたり、お母さんの好きなお菜を買つたりして暮らしていました。ある日のこと、小さい亀が出て来て弟を見あげて、人間の言葉で話しかけてきました。「あなたは本当に感心な人ですね。お母さんに大変孝行なさるそうですね。そこで私がいいことを教えてあげます」「なんだって亀くん、いいことを教えて呉るって」「そうですね。沢山のお金をもうかることを教えます」「ほう、お金のもうかることをかいかい」不思議に思つて「私は亀でも本当はこれだからかなか歌がうまいですよ。ちょっと歌つてみますから聞いてもらいなさい」といって亀は歌いだしました。弟は、亀が歌を歌つてしまつても感心して、

「うまいうまい、節もいし声もいい」といいますと亀は「面白いでしょう。で、私を町に連れて行つて人通りの多い町かどで、今のように歌を歌えば、枯枝なんか売るより、きっと沢山のお金もうちりますよ」「そうだねえ。じゃあ一つそうしてみようか」「そうですね、どうですか。じゃあ、すぐそうしましようよ」亀はつき立てた首をこっくりしい言いました。

さて、そのあくる日、弟は亀をつれて、にぎやかな町かどにやつて来て、大きな声で呼びました。「皆さん、聞いて下さい。これから私の手のひらに乗っている亀が面白い歌を歌います」そう言つて、いるうちに大勢の人が集まってきました。亀は大きな口をあげて、声張りあげて歌を歌い、ついに人間の子供の泣きまねをした時には、皆んなドツと大笑いをしました。そして、それが終ると中の一人が

弟の前にいくらかのお金を出して「さあ、歌のお礼だ」といいますと、皆んな次から次へとお金を持って来て、弟は思わぬお金もうけをして大喜びで家に帰つて来ました。それから後も度々町へ行き亀に歌を歌わせ、その度に沢山のお金が集り、まもなく大変なお金持になりまして、それで、お母さんにおいしい物を食べさせたり、立派な家を建てたり、暖かい着物等をいくつも買ってあげました。それを知つた欲ばりの兄さんは、弟にだまつて亀を町につれて行き、弟のやつた通りに人を集めて歌を歌わそうとしました。が亀は何もいしません。見物人は次第にさおぎ始め「こいつはにせ者だ。歌いもしない亀をもつて来て、俺達をだまして、お金を取るうとして、しまひました。欲ばりをしてはいけないというお話です。」

〔中文大意〕 従前有個地方住着一對兄弟，爸爸一死，哥哥心貪，拿了所有的錢財傢具離家出走了。弟弟却很孝順，一個人侍候母親，過活，因為沒錢，每天上山找些枯枝挑到街上賣，拿賺來的一點錢買米或買些母親喜歡的菜回來。有一天出來了一個小烏龜，抬頭看着弟弟，用人說的話對他說：「你真叫人佩服，這樣孝順媽媽。我教你一件好事。」「什麼，小烏龜？教我好事？」「是啊。教你賺大錢的事。」「噯，是賺錢的事？」他覺得奇怪，烏龜說：「我雖是烏龜，其實歌兒還唱得滿好的呢。我唱一下請你聽着。」就唱了起來。弟弟說：「唱得好唱得好！調子也好聲音也好。」烏龜說：「好玩兒吧？那就把我帶到街上，在人多的角落像這樣唱的話，包你比賣什麼枯枝都可以賺更多的錢。」「那是。那麼就試一下吧。」

第二天，弟弟帶着烏龜來到熱鬧的街角，大聲叫着：「各位！請聽一下，我手掌上的烏龜要開始唱有趣的歌兒了。」不久大批人集攏來了。烏龜張開大嘴，大聲唱歌兒，最後還學起小孩哭，大家都捧腹大笑。完了，有人把幾個錢放在弟弟前面，算是道謝。別人也一個個跟着學樣。弟弟發了意外之財，高興興回家了。以後他常常上街叫烏龜唱歌兒，不久變成了一個很富有的人，給媽媽吃好東西，蓋好房子，還買了許多暖和的衣服給媽媽穿。知道了這事的貪心的哥哥，不讓弟弟賺得把烏龜帶到街上，依樣畫葫蘆想叫他唱歌，可是烏龜却一聲也不吭。看的人開始叫了：「這傢伙是假的，弄了個歌兒也不唱的烏龜想騙咱們的錢。」說得哥哥狼狽不堪。這是個叫人貪心不得的故事。

日本的古代寓言

(中日文對照)

お地蔵さま

地蔵菩薩

むかし、むかし、あるところに正直者のおじいさんがおりました。おじいさんは貧乏でしたが大変働きの者でした。

ある年のこと、おじいさんはほんの少しおもちをつく米を買うお金ができたので、大晦日の日に、その米を買いに町へ出掛けました。その日は雨が降る寒い晩でした。おじいさんはお米屋の前に来た時、来る道で見た三人のお地蔵さまが雨に打たれて、さも寒そうに見えたのが、眼に浮んでなりませんでした。「春が来るまでお地蔵さまは雨ざらしだ。お地蔵さまを雨ざらしにして自分だけおもちを食べるわけにもいきまい。」そう考えるとおじいさんは、おもちの米を買うのをやめ、そのお金で三つの菅笠を買い、おもちの方は粉米と糠の粉糠もちを作ることに決めました。それは笠を買った残りのお金で十分に買うことが出来たのです。「お地蔵さま、これでもかむっていらっしゃい。」帰りの道でおじいさんは菅笠をお地蔵さまの頭の上にかぶせてあげました。「おう、ありがとう、ありがとう。」お地蔵さまは嬉しそうにお礼をいいました。おじいさんは大変満足して家へ帰って行きました。

次ぎの年、やはりおじいさんは少しばかりのお金をため、そのお金で今年こそはおもちをついて食べようと、大晦日の日に町へ出掛けました。外は雪が降っていて、町に行く途中の三人のお地蔵さまはすっかり雪をかぶって、真白になって立っておりました。これを見ると、おじいさんは大変気の毒に思い、おもちの米を買う気にもならなくなりました。おじいさんはとうとう又粉米と糠を買ってしまい、残りのお金で赤い布を買ったのです。そして帰り道、お地蔵さまのところにお立ちどまり、「お地蔵さま、お地蔵さま、この雪の中で、さぞ寒くてお困りでしょう。」そう云って、赤い布を切った小さなお地蔵さまから順々にかけてあげました。ところが一番大きなお地蔵さまにかけてあげる布が足りなくなりました。

た。そこで今度はおじいさんが着ていた蓑と笠をぬぎ、お地蔵さまに着せてあげ、自分は雪にまみれて帰っていきました。

ところで、新年の朝、ごろごろと大きな木を引くような音が聞こえ、おじいさんの家近くに聞こえてきました。その音はおじいさんの家の前で止まりました。おじいさんが外へでると吹雪の中を三人のお地蔵さまが帰って行くところでした。そして、そこには大きな木が一本残してありました。本当に寒い朝だったのでおじいさんがその木をたき木にしようと、おで割ると、中から金や銀がコロコロころがり出て、おじいさんは長者になりました。

【中文大意】 従前有個地方，有個老實的公公。公公雖然窮，可是很勤勞。

有一年，他積了一點點買糯米錢，除夕那天就上街買米。那是個很冷的下雨天的晚上，來到米店前面的時候，公公眼前直攪着路上看到的三個地藏菩薩，被雨打得像是在抖索。「春天到來以前地藏菩薩都得淋雨，可也不能讓地藏菩薩淋雨而光是自己吃年糕」。公公這樣想着，不要糯米了，就買了三個菅草做的斗笠，年糕決定用碎米和米糠自己做粉糠年糕，這樣買斗笠剩下的錢也够了。「菩薩老爺，戴上這個吧」。歸途公公給地藏菩薩戴上了草笠。「喔，謝謝，謝謝」。地藏菩薩高興地道謝。公公很滿意地回家了。

第二年，公公又積了一點點錢，打定主意今年可要搗年糕來吃，除夕那天就上街去了。外頭下着雪，路上見三個地藏菩薩白蒼蒼地站着，覺得可憐，又是碎米米糠，不要糯米了，剩下的買紅布，「菩薩老爺，這樣的雪一定冷得受不了吧？」說着，剪下紅布從小菩薩開始披在菩薩身上。可是輪到最大的菩薩時，布不夠了，公公就脫下蓑衣斗笠，給了菩薩，自己冒着大雪回去了。

新年早上，公公家附近響起了拖木頭的咕轆轆的響聲。那聲音在公公家前面停住了。公公到外頭一看，三個地藏菩薩在暴風雪裏正要回去，而那兒留下了一根大木頭。因為是很冷的早晨，公公想把那木頭當柴燒，拿斧子一劈，却從裏面希哩嘩啦出來了金塊和銀塊，公公成了一個有錢的人了。

日本的古代寓言

(中日文對照)

くらげの骨なし

海 蜃 無 骨

むかし、むかし、大むかし、海に竜宮のあったころのお話です。その竜宮の王様のおきまが、「王様、私は猿のきもが食べとうございませう」といいました。そこで王様は龜に猿のきもを取って来る役目をいつけました。龜は竜宮を泳ぎ出し、遠い波の上を渡って日本の島へやって来ました。龜は水の上に首をあげて陸地の方を眺めながら泳いでいますと、天氣のよい日だったもので、海岸の山の上で一匹の猿が遊んでおりました。龜は大喜びで水の中から大声で呼びかけました。

「猿さん、猿さん、竜宮へお客にくる気はありませんか。」これを聞いて猿はおどろきました。「しかし、竜宮に、何かおもしろいことでもあるかい。」「ありますとも、ごちそうはないでもないあるし、立派な御殿ですよ、竜宮は。」

「では、ひとつこやかいかいなるうか。」猿は龜の計略とも知らず、その甲に乗ってキャツキャツさわいでいるうちに、竜宮へ来てしましました。

竜宮の門の前で待っていると、その門番をしているくらげが猿の顔を見てにやにや笑っております。猿はどうしてくらげが笑うのかわかりませんので、笑うにさせておりましたが、くらげはあまりかたて、猿にいいかけてきました。「猿さん、あなたは何も知らないんですか。」猿はもとより何も知りませんから、「何をですか。」と聞いてみました。

ろうと心配でなりません。」これを聞くと龜はがっかりして「え、きもを忘れてきたんだって、それじゃも一度取りに行きましよう。」龜は行きよりもいっそう速力を出してもとの日本の海岸の猿の遊びも取って来てください。」「はいはい、しかし、こころうさまでした。」猿はそう言うと、龜の甲からおりて山の一番高い木のてっぺんに登って行き知らん顔をしていますと、龜はふしぎに思っています。「海の中には山はない。からだの外にはきもはない。これを聞く、龜はきつとくらげがおしやべりしたに違いないと思つて、大腹を抱いて竜宮へ帰つてその事をうたえました。」

「中文大意」那是很早很早以前，海裏還有龍宮的時候的事了。海龍王的妃子想吃猴肝，龍王叫烏龜去找，烏龜就渡過遠洋來到日本。牠邊看陸地邊游着，天氣很好，海岸的山上有隻猴在玩着，烏龜高興得很，就從水裏大聲叫道：「猴兄猴兄，想不到龍宮作客嗎？」猴子聽了，吃了一驚：「龍宮有什麼好玩兒的？」「當然有，好吃的什麼都有。够派頭的宮殿呀，龍宮是。」「那就去走一趟吧。」猴子不知龜孫計謀，坐在背甲上叫嚷，不知不覺來到龍宮。

在門口兒等着，看門的海蜃盯着猴臉直笑。猴子不懂海蜃為什麼發笑，就讓牠笑去。海蜃却忍不住了，對着猴子開口來：「猴兄，你什麼都不曉得嗎？」「猴子本來就什麼都不知道，問：『曉得什麼？』」大王的妃子想吃猴肝呢，所以把你請來了。」這時烏龜從裏面出來，子嚇得魂飛魄散，可是還裝作與我無關的樣子。被海蜃這麼一說，「猴兄，」「猴兄，請，這邊。」「猴子一邊進去一邊又若無其事地說：『龜兄，真糟糕，這種天氣，就該把肝帶來，我把它曬在山裡的樹上，要是下起雨來，真擔心會讓它淋濕。』烏龜聽了頓時灰心喪氣，「噢，把肝忘了？那就再去走一趟吧。」他趕快往原來日本海岸猿子游玩的山下游去。」「猴兄，快快，快去把肝拿來。」「好好，不過也真勞駕了。」猴兄說着，下了龜甲爬到最高的樹上就不理不睬。烏龜覺得奇怪，「猴兒猴兒，到底怎麼回事兒？」「猴子說了：『海裏沒山，身外沒肝。』烏龜聽了，認為一定是海蜃多嘴，滿肚子氣回龍宮把這事報告給龍王了。結果就算是海蜃拆爛污，被剝皮抽筋，終於變成了現在這種軟弱癱瘓的樣子。」

日本の古代寫言

ふるや 古屋のもり

老屋的「魔厲」

中日文對照

むかし、むかし、雨の降る晩に、おじいさんとおばあさんが、孫に昔話を聞かせていました。孫がたずねていました。

「おじいさん、この世の中で、何が一番こわいでしょうか。」おじいさんがいいました。「こわいものは、沢山あるが、人間ならば、まずどろぼうが一番だ。」すると、その時ちやうど、隣りの馬屋にどろぼうが馬をぬすみに来て、屋根裏にのぼってしまいました。どろぼうはこれを聞いて、(はあ、おれが一番こわいものか。)と、自慢に思つて、ニコニコしました。

「けだものでは何が一番こわいでしょうか。」と、孫が次ぎに聞きました。

「けだものでは、まず、狼だろ。」

とおじいさんがいいました。ところが、またその時、馬屋のすみに、同じように馬をとりきた狼がかくれています。狼は、この話を聞くと、これも自慢に思つて鼻をひくひくさせました。

「もっと、もっとこわいものは。」孫がまた聞きました。おじいさんとおばあさんは、口をそろえて、

「古屋のもりだ。」

「古屋のもりだ。」といひました。古屋のもりというのは、古い家の屋根から雨のもることですが、そうとは知らないどろぼうと狼は、これを聞いてびっくりしてしまい、ガクガクブルブル、ふるえだしました。

そしてどろぼうは、屋根裏から、ドサツと下に落ちました。しかも狼の背中の上に落ちてしまいました。「それもりが来た」と、狼は驚ろきあわてて外に逃げ出しました。

どろぼうはどろぼうで、これは大変、もりの上に乗つたかと思ひました。しかし、いま落されては命がないと思うものですから、一生けんめいに狼の首にしがみつきました。狼の方では、そうされれば、そうされるほど、死にもの狂いでかけました。

そのうちに朝になりました。どろぼうは、もりというのとはどんなおぼけかと思つて、よくよく見ますと、どうも狼に似たげものです。しかし、何にしてもこれは大変と考へておられます。木の枝がたれさがった下を通りました。「この時だ」と、どろぼうはそ

の枝にとびつき、木の上のぼりました。

それとも知らない狼は、一生けんめいかけて、やつと自分の穴に逃げて来ました。気がつくとき背中のもりがいつの間にかなくなつておきます。そこでようやく元気が出てきて、まず友達のところへ出かけて行きました。そして「虎さん、虎さん、おれはひどい目にあつてきた。世の中で一番こわいもりというものに、背中に乗られ、昨夜は一晩中かけどおしに逃げた。今ようやく穴にもどつて来て、命は助かったが、あいつの居る間は安心してこの山におれない、ひとつ力をかしてくれないか。」といひました。

これを聞くと、虎は、「そんなにこわいげものならおれが見つけて、退治してみせるとりきみました。そして二匹でもりを探しにでかけました。少し行くと木の上に狼がいて「虎さん、虎さん、二人そろつてどこへ行くの。」と声をかけました。虎と狼は、これまでのことを一部始終話しました。

すると狼は大笑いして、「そういえば、狼さんが背中に乗せて来たものなら、その大木の枝の上にすわっている。あれがこの世の中で一番こわいげものなにか。あれならおれ一人でいけどつて見せる。」といひました。

狼は人間だということを知っていたのです。しかし、虎と狼は向こうの木の上を見ると、人間に似たもりがいて、こっちの方を

見ていますから、また驚ろいて、いっしょに
ほえたてました。

どろぼうは狼の背中からのがれて、やっ
と木にのぼりましたが、今度は、虎と狼と
いっしょになって、ウオーウオーほえました
から、いよいよ危いと、木の根もとのほら穴
の中にかくれました。

でしゃばりものの狼は、中に居るのは人間
だということを知っていますから、しっぽを
穴の中へつつこんで、「こら、もりいるか、
もりいるか。」と、かきまわしました。

しかし、どろぼうも命がけです。狼のしっ
ぽをつかんで引っぱりました。狼も引っぱり
こまれては大家ですから、ウンタン尾をふん
ぱりました。両方が引っぱり合ったものです
から、狼のしっぽが根もとからポキンと切
れ、狼はころんで、土で顔をすりむき、狼は
キャンキャンいって逃げて行きました。

狼も、「やはりもりはこわい。」と大声
をないて、狼について逃げて行きました。
虎もこれを見て、「これはかなわん。こん
なにこわいもりがいられては、とても日本に
いることができない。」といって、海を渡っ
て、唐の国へ逃げてしまいました。狼と虎

は、「おれたちは海を渡ることができないか
ら、もりはこわいが仕方がない。」とあきら
めて日本にいたこととしました。しかし、そ
の時から、狼はしっぽがなくて、顔が赤く、

何かという歯をむきだすようになりまし
た。狼はまたなき声があんなに高くなった
ということでありませう。

【中文大意】 一個下雨天的晚上，公公婆婆在
給孫兒講故事說：世界上有很多可怕的東西，
拿人來說，最可怕的是小偷兒。這時隔壁的馬
廄正有個小偷兒來偷馬，在天花板上聽到了，
咧開了嘴得意得很：「嘿，老子最可怕呀！」

「動物裏面最可怕的是什麼？」孫兒問。「
狼」。公公說。而這時馬廄的一角也正躲着一
隻偷馬的狼，聽了這話也是鼻子一掀一掀的，
嘿嘿！

「頂頂可怕的呢？」孫兒又問。「老屋的魔
厲！」公公婆婆齊聲回答。日語「魔厲」是說
老屋屋頂漏水，小偷兒和狼不曉得，聽了搖搖
晃晃哆哆嗦嗦抖了起來。小偷兒說時遲那時
快，一失手從天花板一掉掉在狼背上，狼以為
魔厲來了，就慌慌張張往外逃。

而小偷兒也是小偷兒，以為是掉在魔厲上
了，不得了。可是現在被摔下來準沒命，死抓
狼頭不放。狼呢，越是這樣越發狂，不顧一切
跑啊奔哪的。

不久天亮了，小偷兒想知道魔厲是什麼鬼
怪，定眼一瞧，怎麼看都像隻狼。管它像什
麼，老命要緊，正好這時經過一個低垂的樹枝
底下，別錯過！他縱身一跌，攀住了枝條，就
爬到樹上。

狼一點兒不曉得，拼命跑着，好容易逃回自

己的洞裏，穩下脚步，發覺背上的魔厲不知什
麼時候兒不見了，這才振作了點兒，到朋友的
老虎那兒去，說：「虎兄虎兄，老子够慘了，
被世界上最可怕的魔厲騎在背上，昨晚跑了一
個晚上，現在好不容易才回洞裏來。命是保住
了，可是那傢伙一天不走，就不能放心住在這
山裏。幫幫忙吧！」

老虎聽了張起聲勢：「瞧你這樣魂落魄
魄的，一定是相當可怕的怪物，格老子去把它找
出來幹掉！」於是狼虎兩頭出去找魔厲去了。
走了一會兒，樹上有隻猴喊道：「虎兄虎兄，
兩位一道往哪兒去呀？」備陳底細，毛猴大
笑，神氣了起來：「那個呀，就坐在這大樹上
。是那玩藝兒，老子單超一個活捉給你看。」
猴子知道那不過是個人，但在虎狼眼中，那
邊樹上坐着的却是人樣的魔厲在往這邊掃視，
又嚇得你吼我叫。

小偷兒一看這回是狼牙虎口，險哉，就躲到
樹根底下的洞裏去了。愛管閒事的猴子把尾巴
穿進洞裏還人：「喂！魔厲在不在？魔厲在不
在？」說着胡攪一通。而小偷兒也是在拚，抓
住猴尾兩頭兒一拉，整條尾巴給攔斷了。猴子
跌在地上，擦破了臉皮，鳴金收兵，狼也跟在
後頭。老虎看了，說：「這不得了，有這樣可
怕的魔厲在，日本真呆不下去了。」就渡海到
唐國。狼猴没法渡海，只好留在日本，只是從
那時起，猴子沒了尾巴，臉是紅的，動不動露
牙相對，而狼的叫聲也變得那樣尖尖的了。

日本の古代寫言

ねずみの相撲

老鼠的捧角

中日文对照

むかし、むかし、あるところに、貧乏な、おじいさんとおばあさんがおりました。ある日のこと、おじいさんは、山へしば刈りに行きました。すると向こうの山から、「デンカショウ、デンカショウ」という声が聞えて来ました。

(はて、ふしぎなことだ。) おじいさんはそう思って、その音をたよりに、向こうの山へ行って見ました。向こうの山では、一匹のやせたねずみと、一匹のこえたねずみが、相撲をとっておりまして。デンカショウというのは、二匹のねずみが、ぶつかったり、押し合ったり、たがいに掛け合う声だったのであります。

木の間がぐれにおじいさんがよく見ると、やせたねずみば、おじいさんの家のねずみであります。よくこえた、力のありそうなねずみの方は、長者の家のねずみだったので。しかも、長者のねずみは力が強く、おじ

分の方のねずみが、かわいそうになってきました。それで、しばも刈らずにさっさと家に帰って来ました。

そして、おばあさんにいきました。「おばあさん、私は山ですい分かかわいそうな事を見て来てしまった。うちのねずみが、長者どんの家のねずみと相撲をとって、スッポン、スッポン投げられていた。余りかわいそうだから、餅でもついて食べさせてやったらと、そう考えて帰って来た。」

これを聞いておばあさんも「それは良いことを考えつかれました。では、さっそく餅をついて、うちのねずみに食べさせてやりましょう。」そういって二人は餅をつきました。おばあさんはねずみの食べよいような小さな餅を作って、それを戸棚の奥の、ねずみの出て来るところに、置いておきました。

あくる日のこと、おじいさんがしば刈りに行くと、前の日のとおり、やはりデンカショウ、デンカショウという掛け声が出ておりま

いさんの方のねずみを、スッポン、スッポン取って投げておりました。それでもおじいさんの方のねずみは、何度も何度もとつかかって行きませんでした。

す。その声を自あてに向こうの山へ行って見ると昨日のねずみが相変らず相撲をとっておりました。おじいさんは昨日どおり、木の間がぐれにそれを見物しました。するとうちのねずみは、ひと晩のうちに、思いのほか強くなっていて、もう投げられてなんかおりません。二匹のねずみは押し合ったり、突き合ったりして取り組んでおりますけれど、どうしても勝負がつきません。それで、引き分け勝負なしということになりました。そして長者のねずみがいいました。「どうしてお前は、そうひと晩で力が強くなったんだい。」

おじいさんのねずみがいいました。「実は、おれは昨晚、餅をうんとご馳走になったんだ。それで力が強くなった。」これを聞くと、長者のねずみは、それを非常にうらやましがり、

「おれにも、そのお餅をご馳走してくれないかい。」と、いうのでした。おじいさんの家のねずみは「おれの家のおじいさんも、おばあさんも、本当は大変貧乏なので、なかなかお餅はつけないんだ。でも、お前がお金を沢山持ってくるなら、お餅をご馳走してやってもいい。」

そんなことをいきました。「それではお金を持って行くから、お餅のご馳走を頼んだぞ。」長者のねずみはそういいました。

おじいさんはそんな話を聞いているうちに、何だか大変おかしくなりました。家に帰